

## 中国語版 (Basic Transcription System for Chinese: BTSC) の「試作版」作成への 協力作業過程と、そこで考えたこと

謝オン (東京外国語大学大学院博士後期課程)

「多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究」(科学研究費補助金基盤研究(C)2:研究代表者 宇佐美まゆみ)の研究協力作業に参加し、中国語版 (Basic Transcription System for Chinese:BTSC) の「試作版」作成への協力作業を行ってきた。その作業を通して、中国語の表記に関して、考えたことをまとめる。

今回の作業で扱った会話は上海語ネイティブによる中国語の共通語 (普通話) 会話である。すべての普通話を文字に起こすことが可能であるが、その際に、「漢字表記法」と「ピンイン表記法」の2つの選択肢が考えられた。「漢字表記法」によって文字化をするためには、中国語入力ソフトが必要になる。日本仕様のパソコンによって作業を行うときには、たいていのパソコンには中国語入力ソフトが搭載されていないので、特別にソフトを用意する必要がでてくる。一方、「ピンイン表記法」を用いれば、中国語入力ソフトを使用せずに中国語を文字化することができる。例えば、Pan (2000) は、ローマ字とアラビア数字によって、それぞれピンインと声調を表している。つまり、上に述べた2つの表記法のうち、日本仕様のパソコンを用いて中国語の文字化作業を行う場合には、中国語入力ソフトを使用せずに作業をすることができるという点において、「ピンイン表記法」の方が便利であるといえる。ただし、筆者の調べたところ、これまでに公開されている話し言葉のコーパスでは、「ピンイン表記法」を用いたものはなく、「漢字表記法」を用いたものが見られるのみである(北京语言学院语言教学研究所(1993)における文字化資料は、「漢字表記法」を採っている)。そこで、以下に「読みやすさ」と「入力作業のしやすさ」という2つの観点から、「漢字表記法」と「発音表記法」のそれぞれの特徴をまとめてみた(表1参照のこと)。

表1 「読みやすさ」と「入力作業のしやすさ」の観点から見た各表記法の特徴

表記方法	読みやすさ	入力作業のしやすさ	
	内容	正書法	入力ソフト
漢字表記法	会話の流れが分かりやすい	分かち書きのような正書法はなく、聞いたとおりに書く	中国語ソフトが欠かせない
ピンイン表記法	中国語には同音異義語が多いため、文脈に頼って意味を確認していくしかない。よって理解するのに時間がかかると思われる	ピンイン表記法にしたがって、分かち書きをする	中国語入力ソフトがなくても、ローマ字とアラビア数字のみで表示可能

今回、2つの表記法によって文字化作業をしてみたところ、「漢字表記法」のほうが便利であると感じられた。それは、やはり、分かち書きの必要性がないことによるといえる。漢字表記法には、上述したように、環境によっては中国語入力ソフトを必要とするという欠点があった。しかし、現在では、インターネットを通して無料でダウンロードできるソフトがいくつかあり、日本仕様のパソコンであっても、中国語を入力することが可能となっている。そうしたソフトを使用できれば、文字化作業は、漢字表記法による方が円滑に進むと考えられる。また、読みやすさについては、作業担当者が中国語を母語とするため、漢字表記法によるトランスクリプトの方が読みやすいと感じた。しかし、

これについては、研究やトランスクリプト作成の目的に応じて対処することが望まれる。

漢字表記を用いてトランスクリプトを作成する際に、中国やシンガポールで使用されている「簡体字」と台湾で使用されている「繁体字」の 2 種類の字体が使用できる。データの共有化を考えた場合、漢字表記によるスクリプトは「簡体字」バージョンと「簡単字」バージョン 2 種類があった方がよいと考えた。現在、「簡繁互換ツール」という変換ソフトが開発されたため、2 種類の字体の一方を用いて文字化作業を行っていても、「簡繁互換ツール」によって、簡単にもう一方の字体によって表示することができるようになっている。ただし、「簡繁互換ツール」を試してみたところ、簡体字から繁体字への、あるいはその逆の変換率は 100% ではない、つまり変換されるはずの表記がされていないことが確認できた。そのため、字体の互換ツールを使用してデータを共有する場合には、変換されない語彙をリストアップし、簡体字と繁体字の対照表を作成するなどの対処が必要であろう。

今回、普通話による会話を文字化したわけであるが、その際、普通話によって表記できない表現つまり、普通話にない方言の表現があった。普通話は中国語の共通語として使用されてはいるが、実際には普通話のネイティブ話者という者はおらず、個々人の普通話使用能力に応じて、音声や語彙、ないしは文法レベルにおいて、多かれ少なかれ方言が用いられる。そのため、普通話にない表現が発された場合、普通話の漢字表記によって記せないという問題が生じるのである。このような問題はテレビ放送の字幕放送においてもみられる。筆者の観察では、中華人民共和国の普通話番組の字幕放送は、インタビューに現れている方言をそれに相当する普通話の表現に直し、漢字で示して対処している。テレビの番組の字幕放送は、話し言葉の内容を分かりやすく視聴者に伝えることを目的にしているためであると考えられる。しかし、このような対処法では、話しことばを忠実に文字化するという我々の立場では、さらなる工夫が求められる。現段階では、普通話にない言葉をその発音に最も近い普通話で代用し、そしてその本来の意味や機能が分かるように、それに相当する普通話を注釈的に付け加えるという方法を考えている。例えば、上海語ネイティブの普通話会話において発された、「よろしいですか」という表現を「好伐 吗」のように表示するのである。ここでは、上海語の疑問助詞の発音に最も近い漢字表記として「伐」を使用し、さらに、その意味・機能をあらわすために、「伐」の後に、それに相当する普通話の表現を で括って表記している。

以上、中国語の文字化作業をする中で表記に関して抱いた問題点と、その解決法をまとめた。しかし、それらにはさらなる改善の余地が残っていると思われるため、今後は作業を続けながら、よりよい解決法を探っていきたい。

#### 引用文献：

北京语言学院语言教学研究所 1993 《当代北京口语语料 录音文本》 中国北京

Pan Yuling 2000 Politeness in Chinese Face-to-Face Interaction. Ablex Publishing Corporation.

\* 本稿は、東京外国語大学の宇佐美まゆみ教授の指導のもと、以下の研究協力者たちとの共同作業を経て、まとめたものである。

作業者：謝オン、施信余、黄瓊芸